H-4　塩竈市浦戸寒風沢地区　　2012年9月17日（月）

報告者名　稲澤　努　　被調査者生年　①未確認（男）
調査者名　酒井　朋子　　被調査者属性　①株式会社佐浦企画課長
補助調査者　稲澤　努

被調査者（主な聞き書きは話者①から）

＊話者②　生年未確認（女）、寒風沢区長の娘
＊話者③　1932年（男）前副区長、昨年度報告H-2と同一人物

はじめに

2012年9月17日、塩竈市浦戸寒風沢地区の神明神社秋季例大祭の調査。神明社での神事の後、漁協センターに会場を移して直会が行われた。以下はその直会会場での聞き取りである。

話者①

話者は塩竈の酒造会社の関係者で、祭りのナオライに毎年秋発売の自社製品を持ってきた（写真1）。寒風沢に来るのは祭り当日がはじめてという。ただし、塩竈市の農業委員長でもある区長とは長い付き合いがある。各地を転々としてきたが、仙台にはとくに地元意識のような思い入れがある、と語っていた。以下は話者の語った内容の要約である。

酒造会社と寒風沢の関係

寒風沢の米は、復興のシンボルとなると思う。塩竈の離島ではここだけが米づくりをしている。塩竈の米として売り出せるし、塩竈の企業である自分たちとしても助かる。NPOである浦戸アイランド倶楽部が入り始めたころ（5年くらい前）からのつきあいである。
（その時期についての記録は、アイランド倶楽部HP参照 http://www.m-urato.com/jigyou/jigyou.htm）
寒風沢区長は塩竈の農業委員長であり、津波で区長の田はダメになってしまったが、現在はNPOへの技術指導などをしている。今回の祭りに関しては区長からお誘いがありやってきた。

会社の被災地への支援

自分たちの会社は塩竈と東松島に蔵を持っていた。両方被害を受けたが、中でも東松島の蔵は甚大な被害を受けた。そうした被災地の会社として、地元への支援をしなければいけないということになった。そのために何かできないかと考え、去年は酒が1本売れるごとに5円を生産者支援にあてた。例えば、漁業者向けのフォークリフト、ロープなどである。寒風沢ではNPOに農機具の支援を行った。
（詳細は下記HPに http://www.urakasumi.com/hpa/fukkou_project.html）
現在は生産者には行政の補助も出ているので、我々は教育などに支援をという方針で、今年に入ってからは仮設住宅の保育所整備などを行ってきた。去年であればどこも「何もない」という状態だったが、1年半経った現在ではその土地では何が必要なのか、現地のニーズを細かく聞く必要がある。そういう意味でも、こういうお祭りの場に参加して皆さんの話を聞くことは大事であると思う。

寒風沢のナオライを見ての感想

浦戸諸島に 600 人もの人がいて、3 人しか死者がでなかったのは、こういう普段のコミュニティがしっかりしているからだと思う。そう再認識した。子供からお年寄りまでみんな集まる、これが本当のお祭りではないだろうか。

話者②

寒風沢の仮設住宅に暮らす女性。仕事のため毎日、朝一番の船で塩竈に通っている、という。

震災前の秋祭りについて

お神輿は一昨年（2010 年）の秋祭りに出た。担ぎ手がいないので塩竈神社の担ぎ手に来てもらった。島のお神輿は、塩竈神社の神輿に比べると軽いそうだ。お神輿の出ないときは、獅子だけがでる（この獅子は毎年必ず出る）。獅子は自己流で、担ぎ手がお酒を飲んでいるため酔っぱらいの獅子だった。一昨年の前は、7 年前、まだ息子が幼いときに秋祭りに神輿が出た。獅子は毎年必ず出る。

酒などが提供される神輿の休みどころと休みどころの間が非常に短いので、担ぎ手はみんな酔っぱらってしまう。あまりにその間隔が短いので塩竈から担ぎに来た人が「これは酔っぱらうのが当たり前だ」と驚いていた。神輿は集落をまわった後、午後 6 時ころ最後の船が出るときに船着き場に行って、そこで担いでまわって船に見せたりしていた。

お神輿と一緒にまわる神楽について

神楽の太鼓のたたき方には、独特のリズムがある。四角の台に 3 つ小さな太鼓を載せ、大きい太鼓はその後ろからついて歩く。

震災時、自分たちはお寺に避難した。そのとき、息子が将棋を教えてもらったのが、同じ場所に避難していた隣の家の 80 代のおじいちゃん。この方は浦戸小学校で神楽の太鼓のたたき方などを子供たちに教えていた。今は息子さんと一緒に本土で暮らしている。その方が浦戸小学校で神楽の太鼓のたたき方などを子供たちに教えていた。子供たちは、何かイベントなどがあると、太鼓をたたかされている。

昔は、神楽をするのは男の子ということだったので、自分が小さい時にはやらなかった。

話者③

昨年度報告 H-2 と同一人物。昭和 7 年（1932）生まれ。今年の総会まで寒風沢区の副区長をつとめている。

本人のこれまでの生業について

20 歳から船に乗った。当時定時制高校に通っていたが、2 年で中退し、船に乗った。当時は、寒風沢にも桂浜にも定時制の高校があった。

乗ったのは塩竈の船主の船である。最初は底引き網、そのあとはサンマ漁や北洋サケマス漁（刺し網）も行った。底引きは 11 名、サンマは 20 名、サケマスは 15、6 名乗船する船であった。サンマは網を引くのに人手がかかるため、多くの船員が乗っている。

塩竈、気仙沼、宮古、大船渡、函館、釧路、焼津などに行った。港に上がるのはたいてい 1 晩だけで、すぐに出港する。上陸時は給料とは別に、船頭が小遣いをくれるので、食べたり飲んだり遊んだりした。当時は魚がたくさん捕れ、大変儲かったので、船主もうるさいことは言わなかったのだろう。

昭和 32 年（1957）に、船をおりて干し海苔を始めた。これは相当儲かった。しかし、妻が病気になってしまい海苔の仕事を手伝えなくなった。海苔は最低でも 2 人以上の人手がかかるため、それ以降は牡蠣の養殖を始めた。震災でダメになってしまったが、今年からまた始めている。

青年期の祭りへの参加

船は船頭の指図で動くので、祭りだからといって帰れるものではなかったが、偶然帰ってきていれば、参加した。ただし、自分は身体が大きくはないので、神輿担ぎはあまりしていない。おおべこうべを持ったり、塩まきをしたりといったほうが多かった。

御輿渡御の見所のひとつは、渡御のあと神社に戻す前に、担ぎ手が前と後ろから御輿の押し合いをする部分である。これは震災前には港の近くの広場でやっていた。また神社に戻ってから、拝殿の前で３回上に高く持ち上げるということも毎度行っていた。

御輿渡御のときには獅子も出るが、若いときには自分は獅子舞の歌をうたう役もつとめた。「そら舞い込んだ舞い込んだ　獅子舞が舞い込んだ　四つの隅から黄金（こがね）は来（く）　黄金は来」という歌。獅子舞が悪を取り除いて福をもたらしてくれる、という意味の歌。御輿は秋にしか出ないが、獅子は春と秋と両方に出た。

受け取り渡しと祭の鯛

祭のあとには受け取り渡しという行事があって、これは祭道具一式をヤドモトから次のヤドモトへ渡す儀式である。以前は、祭りの翌日に行った。必ず鯛を準備しなければならなかった。

神輿渡御の当日、祭りが終わるのに合わせ、鯛の浜焼きを準備した。炭を使って「焼くとも焦がすともない」ようにした。それを盛り塩した皿にのせる。神輿を神社に戻すときには、それを準備する。翌日はその鯛を受け取り渡しの場所へ持って行った。ヤドモトは役員の中で決める。ヤドモトと次にそれを継ぐ人（次期ヤドモト）で言葉を交わしながら行う。

その儀式のウタイをテープにとったものがあるが、波をかぶってしまったので、どう再生するのか悩ましいところである。「四海波波静かにて国も治まる時津風…」というウタイ。今年は特例なので鯛の浜焼きもない。

地区の総会としきたりの変化

地区の総会は５月末の日曜日。区長など役員を決めなおすのは３年に１回。お祭りの実施の是非、その内容などについては、お祭りのための会合で決める。

祭りの仕方（休みどころの場所など）は、昔は一定だった。毎年決まり事の通りやっていた。しかし、自分が役員をやっている震災前には、「今年はたいへんなので、お休みどころは別のところにしてほしい」など、いろいろと要望がでるようになった。これは世の中が変わってきたということだと思う。

写真１　ひやおろし

写真２　直会の様子